

「オリジナルカゾク」

登場人物

橋口望愛(24)(27) ヘアセット専門店で働く美容師
橋口陸(27) 美容師、望愛の兄
橋口芽衣(20) 大学生、望愛の妹
橋口香子(53) パート、望愛の母
犬飼航輝(25) 営業職、望愛の恋人
星野舞(24) OL、望愛の親友
辻香音(24) OL、望愛の友達
杉本穂(24) 望愛の同僚

同僚 A

同僚 B

客 A

○ファミレス・店内（7年前）

制服姿でペペロンチーノにタバスコを
大量にかける橋口望愛(17)その正面に
星野舞(17)が座りハンバーグを食べる。

舞「いつもそれだよ」

望愛「これが一番美味しいから」

舞「そっか」

望愛「私のいつも食べるものを把握している
なんて、さすが一番の友達だね」

舞「嬉しいけど、そんな順番決めなくていい
よ」

ペペロンチーノを口にしているが、辛くて

ドリンクを飲む望愛。

望愛「え？　なんで」

舞「好きな友人なんて色んなところにいるでし
よ？」

望愛「一番を決めるのは大事だよ、それ以外
は補欠とかエキストラみたいなものだけ
ら」

○カフェ・店内（現在）

望愛が苦笑いしている、その正面に座るのは、辻香音(24)。

香音「一番好き！ 望愛ちゃんが一番の友達、香音ね、望愛ちゃん以外の友達がいないくて、こうして話聞いてくれるの、嬉しいだ」

望愛「そうなんだ」

香音「望愛ちゃんも香音が一番だよね？」

香音と望愛の目の前にカフェオレ二つが届く。

望愛「……ほんとにカフェオレでよかったの？」

香音「望愛ちゃんカフェオレ一番好きでしょ？」

望愛「うん」

香音「（ニコツとする）」

香音は二つ並んだカフェオレの写真を撮る。

○望愛家の部屋（夜）

ワンルームのマンションの一室に帰ってくる望愛。靴を脱ぎテレビをつけ、その次に電気をつける。ため息をつきながらソファーに横たわる。横に置いてある猫のキャラクター、にゃーむのぬいぐるみを手に取る。

望愛「（癒される）……」

LINEの通知が鳴る。スマホを開く望愛。望愛からの「明日帰ってもいい」の返事に母、橋口香子(53)から「陸も芽衣もいるよ」と返ってくる。望愛、「それならまた今度にする」と香子に送る。望愛、テレビをつけてスマホで動画を見る。

○道路（数日後）

望愛スマホをいじりながら、壁に寄りかかり立っている。星野舞(24)が望愛のもとにやってくる。

舞「お待たせ」

望愛「どこ行く？」

舞「一旦そのカフェでいいじゃない？」

望愛「それなら私がよく行くところにしよう」

舞「了解」

○カフェ・店内

望愛、舞、席に座る。舞メニューを開くが望愛は何も見ない。

舞「なににするか決まっている感じ？」

望愛「うん」

舞「私なににしようかな」

望愛「……」

舞「望愛は何にするの？」

望愛「カフェオレ」

舞「あー オツケー」

舞はQRコードを読み込み注文する。

舞「最近いつ来たの？」

望愛「うーん、数日前に香音ちゃんと来たばかりだよ」

舞「（苦い顔をする）あの子か」

望愛「まあ、一番の友達って言われているから」

舞「高校の時、私も何回か話したけど苦手だった、好きなものとか真似してきてさ」

望愛「舞にはわからないかもしれないけど、いい子だよ」

望愛、舞から目を逸らす。

舞「そう？」

望愛「私のこと一番の友達だって」

舞「……」

望愛「まあ私は舞が一番の友達だけど」

舞「ずっと思っていたけど、望愛も香音ちゃんもなんで人に順番決めちゃうの？ 仲間

いい友達ってみんな同じくらい好きなものなんじゃない？」

望愛「大切にする人は明確な方がいいよ、一番だって言ってくれる人と一番って思う人だけでいい」

カフェオレとアイスティーが届き、望

愛はカフェオレを飲む。

舞「全員にそうなの？ 例えば家族とか」

望愛「当たり前だよ、お母さんが一番好き」

舞「兄弟いたよね？」

望愛「いるけど」

舞「仲悪いの？」

望愛「家族ってなんで、自分で選べないんだ

ろ、自分で選びたかった」

舞「……」

望愛「でもさ、結婚相手は自分で決められる

わけじゃん、私にもチャンスあるよね！」

舞「チャンスって」

望愛「自分で選べる家族、オリジナルカゾク

作りたい！」

○NUMBER・外観（朝）（数日後）

看板にヘアセット専門店と書かれている。

○同・店内

店内一人きりの望愛、シザーケースをかけ、アイロンのコンセントを入れ電源を入れる。椅子に腰かけ足を組む、慣れた手つきで髪をセットしていく。すると同僚二人がお店に入ってくる、望愛は足を組むのをやめ姿勢よく座る。

同僚A・B「おはようございます」

杉本穂(24)も同僚と一緒にお店に出勤してくる。

穂「おはようございます」

望愛「おはようございます」

○望愛家の部屋(朝)(数日後)

にやーむのTシャツを着てベッドで寝ている望愛、カラスが大きな声で鳴いている。顔をしかめる望愛。

望愛「うるさいなあ」

ベッドの上でスマホを開き、時間を確認する。あくびをしながら起き上がりカーテンを開ける。カラスを見つける。

望愛「（カラスを睨みつける）」

カーテンを閉めて、キッチンに向かう。冷蔵庫からコーヒーと牛乳を取り出しカフェオレを作る。少し飲み牛乳を足す。トーストを焼き、コップを持ちソファーに座る。スマホでにやむの動画を見る。

望愛「（にこにこ）」

スマホを置き、トーストの様子を急いで見に行こうとするが、カーペットに足をかけ転ぶ。

望愛「いた」

立ち上がり、キッチンに行く、トーストが少し焦げている。

望愛「あーあ」

冷蔵庫から食べるラー油を取り出しト
ーストと一緒にテーブルに置き、ト
ーストに食べるラー油に塗り食べる。

× × ×

動画を見ながら流行りのヘアアレンジ
を試す望愛。

○道路

スマホのマップを真剣に見る、スマホ
をくるくる回しながら、望愛自身も一
緒に回りながら道を確認する。鞆につ
いているにやーむのキーホルダーを落
とす望愛。するとそれを拾う犬飼航輝
(25)。

犬飼「落としましたよ」

犬飼、望愛にキーホルダーを渡す。

望愛「ありがとうございます」

犬飼、望愛に笑顔を向ける。

望愛「（目を逸らす）」

望愛、お辞儀をしてその場を去る。

○ コラボカフェ・店内

店内、にやーむで飾り付けられている。
望愛、注文したにやーむのパンケーキ
と飲み物が届き嬉しそうに写真を撮る。

望愛「（かわいい）」

望愛の向かいの席に犬飼と女性が座る。
犬飼、望愛の存在に気がつく。望愛を
見つめる犬飼。

犬飼「……」

犬飼に気がつき、目が合うがすぐに目
を逸らす望愛。パンケーキを食べる望
愛。

望愛「おいしい」

○ 道路（夕）

グッズが入った袋を眺めながら満足し
た表情で歩く望愛。

○ 橋口家・リビング（数日後）

ソファ―に座る望愛と洗濯物を畳む香子。

望愛「でさ、この前にやーむのコラボカフェに行く途中ですぐキラキラした男の人にキーホルダー拾ってもらって」

香子「……」

望愛「ああいう人ってネガティブになることないんだろうなあ」

香子「……（洗濯物を畳む）」

玄関が開く音がして橋口陸(27)がリビングに入ってくる。

望愛「（嫌）」

陸「なんだよ、望愛いんのか」

望愛「……」

陸「母さんホテル予約したから」

香子「ありがとう」

陸「ここなんだけど」

陸、自身のスマホに映るホテルの詳細を香子に見せる。

望愛「……」

○同・外

望愛、玄関を出ると橋口芽衣(20)と鉢
合わせる。

望愛「……」

芽衣「……」

望愛、そのまま実家を後にする。芽衣、
橋口家に入る。望愛、振り返る。

望愛「……」

○公園

望愛、ベンチに座る。仲良くご飯を一
緒に食べる家族を眺める。

望愛「……」

○望愛家の部屋(夕)

望愛、靴を脱ぎテレビの次に電気をつ
ける。ソファーに座りスマホを確認す
る望愛、スマホには香音からの何通も
のLINEが入っている。望愛は既読
もつけずにスマホを閉じる。

○ N U M B E R ・ 店内（数日後）（朝）

望愛、店内の清掃をしながらドアの方を気にする。

望愛「……」

ドアが開き、来店のチャイムが鳴る、立っているのは香音の姿。望愛は香音に駆けつける。

望愛「なんでここを知っているの!？」

香音「調べればこんなのすぐわかるんだよ」

望愛「（ため息）」

香音「そんなことより、せっかく来たんだから一番かわいくしてね」

望愛、嫌そうな表情を浮かべながら席まで案内する。

望愛「こちらにどうぞ」

椅子に座る香音。

香音「……」

望愛「……」

香音「一番かわいくしてくれればいいからお任せで」

望愛「かしこまりました」

香音「……」

望愛「……」

香音、スマホで鏡越しの写真を撮る。

香音「……」

望愛「……」

× × ×

香音の髪型が完成する。後ろの髪を鏡で香音に見せる望愛。

望愛「後ろはこんな感じですよ」

香音「さすが望愛ありがとう」

望愛「……」

香音「そうだ、言いたいことがあったの、なんでLINE無視するの？」

望愛「色々忙しくて、後で見るから」

香音「絶対だよ」

望愛「うん」

○スーパー（夜）

望愛、買い物かごにコーヒーと牛乳を入れ、激辛カップ麺を迷いなくかごに入れレジに並ぶ。すると後ろから声をかけられる。

犬飼「それめっちゃ辛かったですよ」

振り向く望愛。犬飼、手にプリンをもっている、望愛プリンをちらっと見る。

望愛「辛いもの得意なので」

犬飼「急に声かけちゃってごめんなさい、にやーむのコラボカフェ以来ですね、また会えて嬉しいです、少しお話しませんか？」

○道路

買い物袋を持ち、歩く望愛と犬飼。

犬飼「嫌味とかじゃなくて、一人でもあなたに楽しめているのなんか素敵だなんて思っ
って、僕はどうしても一人で出かけるっ
て身構えちゃうというか、それに、にや

ーむって女性ファンが多いイメージがあ
って勇気がでなくて」

望愛「どうしてですか？」

犬飼「どうしてもかわいい空間に男一人だと
目立つじゃないですか」

望愛「好きなんですよね？」

犬飼「もちろん好きです」

望愛「好きなら堂々としてればいいんですよ、
好きなものに堂々とできないならあな
たは何に堂々とできるんですか？」

犬飼「そうですね」

望愛「にやーむだってその方が嬉しいですよ」

犬飼「次は一人でチャレンジしてみます」

望愛「いや、彼女さんに行けばいいじゃない
ですか」

犬飼「？」

望愛「一緒に来ていましたよね？」

犬飼「もしかして姉のことですか？」

望愛「え？」

犬飼「彼女いないです、あの日は姉に無理言
ってついてきてもらったんです」

望愛「なんかごめんなさい」

犬飼「（笑いながら）いえ大丈夫です」

望愛「偉そうに色々言っちゃった上に恥ずか
しい」

犬飼「嬉しかったです」

望愛「？」

犬飼「こんなに正直に言ってくれる人いない
ので」

望愛「そうなんです、勝手に友達もたくさ
んいるんだと勘違いしていました」

犬飼「友達はあるんですけどね」

望愛「すみません」

犬飼「（笑う）」

望愛「……」

犬飼「こんなに、人と安心して話せるの久し
ぶりです。またお話したいので、もし
よかったら連絡先交換してくれませ
んか？」

望愛「いいですけど」

犬飼「よかった、そうしたらこれ」

QRでLINEの交換をする望愛と犬

飼。

犬飼「ありがとうございます」

望愛「……じゃあ、私こっちなので」

望愛、分かれ道を指さす。

犬飼「じゃあまた」

望愛、すたすたと犬飼を背にして歩いていく。

犬飼そんな望愛の背中を望愛

が道を曲がるまで見守る。

犬飼「……」

○望愛家の部屋

犬飼と交換したLINEを眺める望愛。

望愛「……」

赤く染まる激辛カップ麺を開け、麺を

すすする望愛。

望愛「……」

○橋口家・玄関（夜）（数日後）

靴を履く望愛、望愛の後ろに立つ香子。

望愛「じゃあまたね」

香子「気をつけてね」

望愛、玄関を開け外に出る。

○道路

望愛、暗い道を歩く、後ろから人につ
けられている気配を感じ、何度も後ろ
を振り返るが誰もいない。

望愛「……」

○橋口家・玄関

息を切らしながら家に入る望愛。香子
がリビングのドアから出てくる。

香子「どうしたの？」

望愛「誰かに後ろからつけられた」

香子「まだ外にいるの？」

望愛「分からない、これじゃ帰れない」

香子「私が一緒に帰るにしても危ないもんね」

望愛「……」

香子「うち泊まっていけば」

望愛「明日仕事だし、なるべく帰りたいたい」

香子「陸に話して車で送ってもらおう？」

望愛「それしかないよね」

香子「話は私からするからそうしたら？」

望愛「うん」

○道路・車内

運転する陸と助手席に座る望愛。

望愛「……」

陸「……」

車がマンションの前で止まる。ドアを開ける望愛。

望愛「ありがとう」

陸「おう」

望愛、ドアを閉める。陸が運転する車はマンションから離れる。望愛は車を見守り見えなくなってからマンションに入る。

○望愛家の部屋

部屋の電気をつけ、窓から外を確認してからカーテンを閉める望愛。スマホに通知が来る。

望愛「！」

望愛通知を開く。犬飼からLINEで「今度ご飯行きませんか？」とある。

望愛「（どうしよう）」

悩んでいる望愛に犬飼からまたLINE Eが来る「僕は行きたいです」とあり、望愛は一度スマホを閉じる。

望愛「……」

○カフェ・店内（数日後）

望愛の正面に舞が座り、望愛はカフェオレを飲む。

舞「それでなんて送ったの？」

望愛「まだ返せてないんだよね」

舞「さすがにかわいそうだよ」

望愛「でもどうしたらいいのか分からなくて」

舞「ご飯行きたいの？行きたくないの？」

望愛「行きたい、でも男の人と一対一でご飯

なんてほとんど初めてだし」

舞「オリジナルカゾクへの第一歩じゃん」

望愛「そうだけど、絶対話合わないよ」

舞「話してみないとわからないでしょ」

望愛「そもそも付き合うって決まった訳じゃ

ないし」

舞「すぐそうやってやらない言い訳するんだ

から、行きたいなら行ってみなさい」

望愛「……」

○望愛家の部屋（夜）

クローゼットにかかっている服を見な

がら考え込む望愛のもとに、香音から

LINEが届く、「この前航輝と一緒に

にいたでしょ」のメッセージに驚く望

愛。

望愛「なんで」

望愛は香音に「なんで知ってるの」と送る、すると香音から「一緒にいたことそれとも航輝を知ってること？」と送られてくる。

望愛「……」

香音から続けて「この前話そうと思っ
て待ってたのに」とLINEが来る。

望愛は香音のLINEをブロックする。

望愛「……」

望愛、窓から外を確認しカーテンを閉める。

望愛「……」

○公園（数日後）

望愛、きよろきよろしている犬飼を見
つけ声をかける。

望愛「お待たせしました」

犬飼「僕も今来たところです、服と髪似合っ
てますね」

望愛「ありがとうございます」

犬飼「どういたしまして」

望愛「ご飯にするにはまだ早いですよね」

犬飼「少し歩きますか」

望愛「はい」

歩き出す、望愛と犬飼。

犬飼「そういえば、敬語そろそろやめません

か？」

望愛「そうですね」

犬飼「じゃあここからは敬語なしで」

望愛「……」

犬飼「……」

望愛「……」

犬飼「……」

望愛「家族と仲いいんだね」

犬飼「そうだね、姉と出かけられるくらいに

は、仲いいはずかな」

望愛「いいね、恵まれていてうらやましい」

犬飼「仲良くいられるようにお互い頑張って

いるけどね」

望愛「なんか失礼なこと言っちゃったね、ごめん、何も知らないのに」

犬飼「謝ることないよ」

望愛「……」

犬飼「仲良くしてないとあつという間に居場所がなくなるんだろうなって、それに両親が仲良すぎて自分にはこんな家族で出来るのかなって不安なんだよね」

望愛「……」

犬飼「望愛ちゃんは家族とあんまり？」

望愛「うーん」

犬飼「……」

望愛「昔、私が6歳の誕生日に家族で旅行行く約束していたんだけど、急にお兄ちゃんが行きたくないって反抗期だったから駄々こねちゃって、妹も行きたくないって言い出して収集つかなくなってるのに、お母さん何にも言ってくれなくて。私は楽しみにしてたのに、結局旅行はキャンセルになっちゃったの」

犬飼「……」

望愛「でも次のお兄ちゃんの誕生日も妹の誕生日も旅行に行つて、私との約束はすつかりなかったものなつた。話を聞いてほしくて共働きでお兄ちゃんは手がかかるし妹もいるから、そうしたらどんどん甘え方分からなくなって私つて必要ないのかなつて今もどう家族に接したらいいかわからない。嫌いだけど嫌いになり切れなくてずつと苦しい」

犬飼「……」

望愛「こんな話ごめん、家族の話するつもりなかつたのに」

犬飼「いいと思う」

望愛「？」

犬飼「どっちでもいいと思う、家族が好きでも嫌いでも、僕も分からないし、好きと嫌いがどっちもあつて、たまにどちらかの気持ちが大きくなつちやうのは自分がどう向き合うか模索していて相手も自

分も大切できている証拠なんだと思う、
たくさん考えたうえで嫌いならそれはそ
れでいいと思う」

望愛「……」

犬飼「家族とはいえ外の環境で人はいくら
でも変わるからずっと仲良くなっても
のすごく難しいからね」

望愛「うん」

犬飼「長々話しちゃってごめんね、つまり
僕は今ある好きを大事にしたいってこと
が言いたかった」

望愛「……」

航輝、足を止める。望愛、航輝を見
つめる。

航輝「いきなりなんだけど、望愛ちゃんが
好きです」

望愛「！」

航輝「付き合ってくれませんか？」

望愛「……はい」

○望愛家の部屋（夜）

望愛、ソファ―に座りにやーむのぬいぐるみを抱える。

望愛「今ある好きを大事に」

望愛、にやーむを見つめる。すると航輝からLINEで「おやすみ」とくる。

LINEを開き望愛は頬を緩めながら「おやすみ」と返す。

望愛「（嬉しい）」

○NUMBER・店内（朝）（数日後）

店内に一人きりで椅子に座り、カフェオレを飲む望愛。

望愛「（ご機嫌）」

舞からLINEが来る。確認する望愛、LINEには「香音のインスタ見つけた」とURLが一緒にある。インスタを開く望愛。インスタには望愛が見切れている写真や、望愛の後ろ姿の写真など匂わせのよう投稿

ばかり。最新の投稿には「一番の友達」と書かれている。

望愛「……」

インスタを遡ってみる望愛。すると制服姿の犬飼と香音のツーショット写真を見つける。望愛は動揺しながらスマホを鞆にしまう。

望愛「……」

望愛思考が固まる穂が出勤してくる。

穂「おはようございます」

望愛「……」

穂「？」

望愛「……」

穂「橋口さん今日も早いですね」

望愛「……」

穂「橋口さん」

望愛、穂に気が付きびっくりする。

望愛「おはようございます」

穂「そんなボーとしてどうしたんですか？」

望愛「なんでもないから大丈夫」

穂「……」

望愛、立ち上がり移動しようとした瞬間椅子の足に引っ掛かり転ぶ。

穂「大丈夫ですか？」

望愛「大丈夫、大丈夫」

穂「なんか珍しいですね」

望愛「……」

○望愛家の部屋（夜）

部屋着の望愛、見えないテレビがついたまま、ソファでスマホをいじる。すると犬飼から「土曜日どこか出かけない？」とLINEが来る。望愛「仕事だから無理かな」と送る、犬飼から「日曜日はどう？」と返事がある、望愛「予定があるから」とすぐ返事をする。犬飼から「平日のほうがよかったりするかな？」と来る。望愛「最近忙しいからまた今度」と送ると、犬飼から「時間空いたら

いつでも言って」と返ってくるが、
スマホをひっくり返し見えないよう
にする望愛。

望愛「……」

○犬飼家の部屋

望愛とのLINEを眺める犬飼。

犬飼「（不安）」

○コンビニ・店内

部屋着のまま店内を見る望愛、激辛
カップ麺を手取る。

○道路

コンビニの袋を持ち、暗い道を歩く
望愛。手をつなぐカップルに目が行
く。

望愛「……」

○NUMBER・外（朝）（数日後）

お店の前に立っている香音。香音に気が付き、道を引き返そうとする望愛。しかし望愛の存在に気が付く香音。

香音「望愛！」

香音、望愛のところまで走る。

望愛「（最悪）」

香音「望愛」

望愛、香音のほうを見る。すると香音が泣き出す。

香音「望愛、ごめんね」

望愛「……」

香音「また仲良くしたい、一番の友達でしょ？」

望愛「……」

香音はずっと涙を流している。

香音「ダメ？」

すれ違う人にちらちら見られる望愛と香音。

望愛「わかったから泣かないで」

香音「ほんと？ また仲良くしてくれる？」

望愛「うん」

香音「じゃあ、ブロック解除して今」

望愛「……わかった」

望愛、香音にスマホを見せながら、

ブロックを解除する。

望愛「……」

○望愛家の部屋（数日後）

テーブルの前の床に座る望愛と舞。

舞「え？ それで許しちゃったの！？」

望愛「うん、だって反省していたし」

舞「そんなわけないじゃん」

望愛「なんでそう思うの！ 舞にはわから

ないじゃん」

舞、スマホを開く。

舞「やっぱり」

望愛「……」

舞「ほら」

舞、香音の最新のインスタの投稿を見せる。そこには「仲直り、やっぱり望愛には私しかないからね」と

望愛の手元の写真付きで載せてある。

舞「こんな自分勝手なこととして仲直りとか、自分が望愛に何したか理解してないんだよ」

望愛「そんなことないよ！ 香音ちゃんは私のことを一番に好きでいてくれてるんだよ！ 私も香音ちゃんのこと好きではないといけないの！」

舞「望愛はすぐそうやって自分から逃げるよね、向き合って見えるけどずっと逃げてる」

望愛「……」

舞「そんないつも誰と比べてるの」

望愛「比べてなんかないよ！」

舞「比べてるじゃん！ 一番一番って！」

望愛「……」

舞「いい加減気づきなよ！」

望愛「舞には関係ないじゃん！」

舞「じゃあ勝手にすれば」

舞、望愛の家を飛び出す。望愛、ポツンと座り静まり返る。

望愛「……」

○橋口家・リビング（数日後）

家の中は暗く静まり返っている。望愛は今日の日付のカレンダーに旅行と書かれているのを見つける。

望愛「……」

○公園

騒がしい公園のベンチに座る望愛。

望愛「……」

○コンビニ・店内

望愛、スイーツコーナーを見る。一番人気と書かれているロールケーキに手を伸ばすがやめる。

望愛「……」

望愛、隣に並ぶ二番人気と書かれて
いるプリンを手取る。

○望愛家の部屋

望愛、靴を脱ぎ、テレビの次に電気
をつける。ソファーに座りスマホを
いじる。

望愛「……」

スマホを置きプリン開けて食べ始め
る。

望愛「おいしい」

望愛、涙をこぼす。

望愛「…… 帰りたい」

○NUMBER・店内（数日後）

客が入店し席まで案内する望愛。

望愛「こちらにどうぞ」

椅子に座る客。

望愛「どんな感じにしたいとかイメージありますか？」

客A「今日は推しに会いに行くので、一番かわいくしてください！」

望愛「（困る）かしこまりました、かわいくしていきますね」

○望愛家の部屋（夜）

靴を脱ぎテレビをつけそのあと電気をつける望愛。

望愛「（ため息）」

ソファーに座る望愛。

望愛「……」

テレビを少し見るがテレビを消す望愛。

望愛「……」

望愛、香音のLINEを開き「明日、時間ある？」と送るとすぐに既読がつき「望愛から誘ってくるの初めてだね！うれしい」と返事が来る。

○カフェ・店内（数日後）

嬉しそうな表情で望愛の正面に座る香音。

香音「今日はどうしたの？」

望愛「聞きたいことがあるんだけど」

香音「うん！」

望愛「単刀直入に聞くけど、航輝君とはどんな関係なの？」

香音「元カレだよ、学生のころ付き合ってた」

望愛「（小さい声）やっぱそうなんだ」

香音「当時お互い初めての恋人で航輝なんて私が初恋相手なの、一番目の相手ってこと、きつと航輝、これからの人生ずっと私のこと忘れられないと思う」

望愛「（イライラ）」

香音「でも安心して！ 香音はもう航輝に興味ないから、望愛が困ったとき何でも香音に聞いて、アドバイスできると思う」

望愛「……」

香音「香音が一番になっちゃったから、望愛は二番目になっちゃうね」

望愛「あのさ！」

香音「？」

望愛「一番ってそんなに大事？勝手に順番つけて、ほんとには自分に自信がないんでしょ！私と同じ、人に向き合っているようでほんとは独りよがり、自分からも人からも逃げて、だから安心して帰れる場所がない、初めて会った時からあなたに違和感があったけど、どうしてかやつとわかった、誰かに執着して自分をごまかしている大嫌いな自分に似てるから」

望愛、涙を流すが頑張って拭う。

香音「（響いてない）」

望愛「もう会わない、会いたくない、一生連絡してこないで」

望愛、立ち上がりその場を去ろうとして一度引き返す。

香音「？」

望愛「あと！ 航輝君はあなたのものじゃないし誰のものでもない、あなたはもう必要ない、自分の価値を証明するものに使わないで」
カフェを出る望愛。

香音「……」

○公園

涙を拭いながらベンチに座る望愛。パトミントンをしながらはしゃぐカッパルと追いかけてこする家族を呆然と眺める望愛。

望愛「いいな」

公園を見渡しているとカメラを持った犬飼を見かける。犬飼は望愛に気が付いていない。犬飼から目をそらす望愛。

望愛「（気になる）」

もう一度犬飼がいたほうを見るが、犬飼の姿がない。

望愛「……」

望愛、犬飼のLINEを開き文字を打とうとした瞬間、カシヤとカメラのシャッター音が鳴る。望愛が振り返るとカメラを構えた犬飼の姿。

望愛「！」

犬飼「今日の髪型もかわいいね」

望愛「……」

犬飼、カメラを掲げ、望愛を見る。

犬飼「前から思っていたけどいつも自分でセ

ットしてるの？」

望愛「うん」

犬飼、望愛の正面に立つ。

犬飼「隣座ってもいい？」

望愛「（うなづく）」

望愛、座るスペースを作る。犬飼、望愛の隣に座り、望愛の髪をじっと見る。

犬飼「すごい、器用なんだね」

犬飼、望愛をまっすぐにみるが目をそらす望愛。

望愛「一応プロだから、でも器用なんかじゃないよ、練習して何とか出来ているだけ」

犬飼「頑張ったんだね」

犬飼、望愛の目を見て微笑む。

望愛「（申し訳ない）」

望愛、沈んだ表情になる。犬飼が心配そうな表情に変わる。

犬飼「何かあった？」

望愛「実は、辻香音ちゃんと友達だったんだけど、航輝君が元カノだったって知って、どう接したらいいか分からなくて、っちゃって、会う日わざと断って航輝君から逃げてた」

犬飼「……」

望愛「ごめんなさい」

犬飼「心配させちゃっていたんだね、気づいてあげられなくてごめんね」

望愛「そんな、航輝君は何も悪くないから」

犬飼「……」

望愛「私が勝手にネガティブに考えて逃げて
ただけ」

犬飼「……」

望愛「……」

犬飼「ちなみに辻さんとはまだ仲良くして
る？」

望愛「（首を振る）」

犬飼「安心してほしいから言うんだけど、辻
さんとはもうとつくの昔に別れていて、
もう連絡先も知らないし、興味もない、
辻さんになんて言われたか分からないけ
ど、僕は今望愛ちゃんが好きだし大切だ
から、それだけは知っていてほしい」

犬飼、望愛の目をまっすぐに見つめる。

望愛「（深くうなづく）」

犬飼「勇氣出して話してくれてうれしい、あ
りがとう」

望愛「私こそありがとう」

犬飼「どういたしまして」

犬飼、望愛に笑顔を見せる。望愛、はにかむ。

犬飼「そういえば望愛ちゃんは美容師さんだったんだね」

望愛「うん、正確にはヘアセット師なんだけど」

犬飼「じゃあ、僕はお客さんとしてはいけな
いか」

望愛「（笑いながら）巻いてくるくるになら
できると思うよ」

犬飼「（笑いながら）くるくるか、お願いし
ちゃおうかな」

望愛「（笑顔）」

犬飼「まだまだ望愛ちゃんのこと知らないこ
とだらけだなあ」

望愛「そんなの私もだよ、航輝君のこと全然
知らない」

犬飼「（うれしい）」

望愛「カメラ好きなんて知らなかったし」

犬飼「これからお互いゆっくり相手のこと知
つていこう」

望愛「うん！」

犬飼そつと望愛の手に触れる。望愛、
恥ずかしそうにする。

望愛「外で手をつなぐのはちよつと恥ずかし
くて嫌かも」

犬飼「ごめん」

望愛「（ふふと笑う）」

犬飼「うわー なんか恥ずかしい」

犬飼、手で顔を隠す。そんな犬飼をス
マホのカメラで撮る望愛。シャッター
音に気が付く犬飼。

望愛「さつき撮られたから、仕返し」

犬飼「（笑いながら）やられた」

望愛「（いたずら気に笑う）」

○ N U M B E R ・ 店内（朝）（数日後）

すでに同僚二人と穂が準備を始めてい
る。望愛お店に入る。

望愛「おはようございます」

同僚 A・B「おはようございます」

穂「おはようございます、橋口さんが一番のりじゃないの珍しいですね」

望愛「たまにはね」

望愛、袋から紙パック牛乳を出す。

穂「あれ？ 牛乳なんて飲んでいましたっ

け？」

望愛「いや、なんかカフェオレこだわって飲んでいたんですけど、牛乳が好きだっただけかもって気づいたんですよ」

穂「なんですかそれ」

望愛と穂が笑う。

○コンビニ・店内（数日後）

お菓子コーナーで色んなお菓子をかごに入れる望愛。

○舞家の部屋・外

舞、玄関の前につき、ドアのノブにかけてあるビニール袋に気が付く。恐る恐る袋の中を確認する。袋にはたくさ
んのお菓子と手紙がある、手紙を開くと「この前はごめん、今度ちゃんと話
したい、あと舞の好きなもの教えてほしい、望愛より」と書かれている。

舞「（笑う）こんな一人で食べられないし」

○橋口家・玄関くリビング（数日後）

望愛、玄関で靴を脱ぎリビングのドアに手をかけるが、陸と香子の声が聞こえ腕を下に落とす。

陸声「あとさ、母さん、これ望愛に渡しておいて」

望愛「……」

香子声「どうしたのこれ」

望愛「……」

陸声「望愛好きそうじゃん、だから」

香子声「いいけど」

望愛「……」

陸声「俺からとか言わなくていいから」

香子声「はいはい」

望愛「……」

望愛、深呼吸してリビングのドアを開ける。リビングには陸と香子と芽衣の姿。

陸「！」

望愛「直接渡してよ！」

陸「……ほら」

陸、望愛に猫のキーホルダーを渡す。

望愛「ありがとう」

陸「おう」

芽衣「あれ？ お姉ちゃん猫好きだった？」

香子「そういえば、昔猫飼いたがっていたね」

望愛「うん」

芽衣「知らなかった、お兄ちゃん知ってた

の？」

陸「うん、まあな」

望愛「ありがとう」

三人を眺める香子。

香子「（ニコツと笑う）」

○望愛家の部屋・玄関（3年後）

2LDKのマンションの一室の玄関で
靴を履く犬飼。

犬飼「行ってくるね」

犬飼、リビングに向かって言う。望愛が玄関までくる。望愛、左手の薬指に指輪をはめている。

望愛「私も一緒に出る！」

急いで靴を履く望愛。

犬飼「ゆっくりでいいよ」

望愛「うん」

○道路

手をつなぎ歩く望愛と犬飼。

犬飼「そういえば、外で手つないでいるけど

いいの？」

望愛「いいの！」

犬飼「なにそれ、あの時遊ばれていたってこ
とか」

犬飼、望愛笑いあう。

望愛「そんなことないよ」

犬飼「ほんとかな？」

望愛「（笑顔）」

犬飼「（笑顔）」

望愛、足を止める。犬飼も合わせて止
まる。

望愛「ここまでかな」

犬飼「うん」

望愛、犬飼、繋いでいた手を放す。

望愛「行ってらっしゃい」

犬飼「行ってきます、行ってらっしゃい」

望愛「行ってきます」

犬飼、望愛を背に歩き始める。曲がり
角まで見送る望愛。犬飼、道を曲がる
瞬間、振り返り望愛に大きく手を振る。
望愛も大きく手を振る。

完